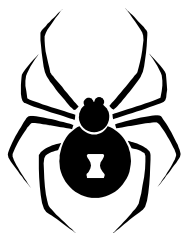


No. 27

2010 - 11 - 25

日本蜘蛛学会



トピックス

日本蜘蛛学会 第 42 回大会 参加日記

柊 雅実

2010年8月21日から22日の二日間、東京渋谷の東京環境工科専門学校において日本蜘蛛学会第42回大会が開催されました。今回の会場は例年、東京蜘蛛談話会の例会・総会の会場となっており、一昨年から談話会会員になったばかりの私にも馴染みのあるところです。そのお陰で、本来ならば「初の学会発表」という緊張感でガチガチになっていたはずの私も、少し

ばかり軽い足取りで会場に向かうことができました。

8月21日：私が初めて蜘蛛学会に参加したのは2008年の大阪大会。窮屈な4列シートの夜行バスで一晩かけて会場に辿り着いた時を思い出すと、電車に乗ること僅か30分の近さでの今大会は素直にありがたいものです。しかし、大阪と大いに異なるのが今回は自分も発表者になるという事実。「クモ屋」の大先輩たる学会員の方々に貴重なご意見を頂けるということに胸が膨らむ一方、その大先輩方の目に自分の研究はどう映るのかという、期待と不安の両方を抱えつつ会場に到着しました。

初日は、口頭発表12題、ポスター発表5題にシンポジウムという濃密なプログラムでした。午前中に自分の発表を控えていたため、最初は他の方々の発表の間も心臓をバクバクさせてい



第42回大会参加者一同

たのを今も鮮やかに記憶しています。しかし、午前中の発表は緊張で余裕がない私をも、思わず惹きつける研究が数多く発表されました。井原庸さんや甲野涼さんによる、ヤミサラグモ類の外雌器と雄触器にみられる「錠と鍵」の関係に関する研究には特に驚かされました。井原庸さんが熟練された観察眼で、これらの構造的な「錠と鍵」の関係を明らかにし、甲野涼さんによって、室内実験で同種あるいは異種間での交尾行動及び成功率に関する検証が行われました。後者の発表では、実際に交尾行動の一部始終を撮影した映像を流しながら解説が行われましたので、「錠と鍵」の関係が交尾成功に重要であることが手に取るように分かりました。さらに、萩野康則さんの千葉県立中央博物館におけるクモの企画展示の事例報告も注目を集めました。「カネもヒトもモノもない博物館で、どのように企画展を行うのか」というユーモア溢れる発表には思わず声を出して笑ってしまいました。

さて、当の私自身の発表はどうであったのかと言いますと、(私個人にとっては)非常に実りあるものとなりました。今回、私は西暦 2000 年に伊豆諸島の三宅島で起こった大噴火が島内のジョロウグモ個体群にいかなる影響を与えたか、という内容を発表させて頂きました。研究の問題点を指摘する忌憚ない質問や考察を深められるようなご意見を頂き、より成果を進展させられる手ごたえを感じる事ができました。また、研究に進展がありましたらご報告したいと考えておりますので、その際にご意見・ご質問等よろしくお願ひいたします。

その後、昼食を挟んで午後の部が総会から始まりました。今年は、去年から審議されていた名簿作成の進捗状況や学会名称のカタカナ表記(「日本蜘蛛学会」から「日本クモ学会」への変更)等が議題に上がりました。鶴崎会長自らが

名簿作成を行われているのは驚きましたが、近々学会員全員に名簿掲載の意思を確認する書類が送付されるとのことです。全国の研究者の方々と交流をする良い機会ともなりますので、私は是非とも掲載して頂こうと考えています。学会名称のカタカナ表記については、「一般の人には『蜘蛛』という漢字は読みづらいのではないか」という観点に立って表記の変更が提案されました。学会名称の表記変更は簡単に結論付けできる問題ではないため、アンケート調査による学会員全体の総意形成が行われるそうです。私個人としては、一般の方々、特に小中学生等の低年齢層には「蜘蛛」という漢字はやはり難しいなと感じますので、平易な表記に変更するのは悪くないのではないかなと思っています。しかしながら、多方面からの考察が必要とされる案件ですので、アンケートの結果を待ちたいと考えています。

総会が終わると、次はポスター発表です。今年は 5 題と非常に多く、全ての発表内容を理解するには若干時間が不足していたものの、印象深い発表が多く見受けられました。今年のシンポジウムの世話人を務める馬場友希さんの発表では、農地周辺の草地における植生とクモ類の関係を定量的・定性的に評価されており、その調査方法や解析方法はとても勉強になりました。また、ポスター発表特有の、発表者とのコミュニケーションでも非常に参考になるお話を聞きました。特に土壌性カニムシ類の季節消長について発表された佐藤秀文さんの「カニムシ類は非常に面白い生態や行動をもっているのに、過去の文献や研究者仲間が少なく残念」というお話にはいたく考えさせられました。と言うのも、現在私が一心にクモ研究に没頭できているのも、多くの成果を残して下さった研究者の方々や有益な助言を下さる諸先輩方のお陰あつ

てのことであり、その恩恵をしっかりと還元できる研究を自分もしなければなあ、と身も引き締まる思いになったからです。

その後、一般講演を3題挟んで始まったのは、シンポジウム「農地生態系におけるクモの役割」です。「なぜ現在、日本でクモの生態的役割が注目を集めているのか」について、世話人の馬場友希さんの丁寧な趣旨説明に始まり、農地生態系におけるクモの役割を模索する最新研究が発表されました。

今回のシンポジウムで議論されたのは、クモの「土着天敵」としての役割と「指標生物」としての役割についてです。まず土着天敵についての研究では、DNA マーカーを用いてクモ類による害虫への捕食量を推定した小林徹也さんの発表や環境保全型水田（農薬の使用量を制限した水田）40枚を利用して、クモ類やイネ害虫などの密度および害虫被害の関係性を調べた高田まゆらさんの意欲的な発表がありました。結果は、必ずしもクモ類による害虫への捕食率が高い訳ではないとの内容でしたが、直接的な捕食だけが害虫の抑制に有効な訳ではないでしょうから、今後も様々なアプローチによって評価されていく必要があるのではないかと印象を受けました。一方、「指標生物」に関する田中幸一さんらの発表は、クモが農業環境指標として有効であることを示唆した結果が示されました。今後はその指標となるクモの調査法・評価法を開発されるとのことです。指標生物（クモ?）の調査法・評価法の確立は市民団体等の方々がクモを調べる契機、ひいては興味をもつきっかけになると思いますので、その完成が今から待ち遠しい限りです。その反面、評価法に誤りがあった場合、世の中に間違った調査結果が出回ってしまうことにもなり兼ねませんので、開発には十分な議論が必要なのかなとも同時に感じた

次第です。尚、シンポジウム最後の総合討論の際には、演者とコメンテーターの方々の位置が逆になってしまう（演者の方が傍聴席に戻ってしまい、コメンテーターの方々が発表席に座る）ハプニングもありましたが、その状況を学会員の方々は笑顔で見守っており、蜘蛛学会特有のアットホームな雰囲気は、今年も健在なんだなあと何かホノボノとした気持ちになりました。

シンポジウムの後は、東京環境工科専門学校内に会場を移し、懇親会が開かれました。長時間、頭をフル回転して最新知見に浸った後は、やはりアルコールが欲しくなるのがクモ屋のみならず人間の性。乾杯の音頭を務められた鶴崎展巨会長の「近年、学会での発表のレベルが高くなってきている。難しい話も多いが、少しついていけない位のほうが学会の発展に良いのではないか」というお話に始まり、アツという間に一次会、二次会と時間が過ぎていきました。私自身ついていくのがやっとの発表や日頃の勉強不足を思い知らされる発表もありましたので、この経験を糧にさらに勉強に邁進していきたいと肝に命ずる学会参加一日目となりました。

8月22日：大会二日目も一日目と同様の朝10時から、8題の口頭発表がありました。自宅が会場から近いとはいえ油断は禁物。二日目の朝寝坊を恐れて、三次会までであった初日の懇親会



懇親会のヒトコマ

を二次会で失礼させて頂いたのが功を奏したのか、なんとか定刻前に到着できました。二日目は地理的変異や種分化といった分野の発表が多く見られ、そのアプローチ方法も多種多様でした。長崎県においてヤチグモ類について調査されている奥村賢一さんは形態情報から、本州中部のアカサビザトウムシについて調べられている鶴崎展巨さんは色班や染色体数から考察が行われているのに対し、西日本のニホンアカザトウムシについて調べられた伊藤桂さんや全国的にキシノウエトタテグモ属の調査が行われている谷川明男さんはミトコンドリアや核遺伝子の塩基配列から系統地理学的な考察が行われました。その多様なアプローチ方法にほとほと感心させられると共に、途方もないほど広域な対象地域を入念且つ地道に調べられている発表者方の姿がとても印象に残りました。

そして、マダラヒメグモの幼生休眠と生殖休眠について調べた田中一裕さんの発表が、今年の蜘蛛学会大会のフィナーレを飾りました。この発表では、幼生と成体で休眠を誘導する条件が異なっていることが報告され、両者が異なる季節に休眠に入ることが示唆されました。幼生と成体で休眠を誘導する条件が異なるという新発見にも驚かされましたが、何よりもその建設的で無駄のない研究計画に強い感銘を受けました。アプローチの方法一つで非常に簡潔に事象を捉えられる事を改めて学ばせて頂いたことにより、今後の自分の研究計画に活かせる視点を持つことができました。

かくして、学会発表デビューとなった第42回日本蜘蛛学会大会は、私にとって多くの収穫を得る誠に有意義な場となりました。データは持っているが学会発表は未経験という方は是非とも発表されることをお勧めします。発表することによって、自分の持っているデータの問題

点、そして自身も知らなかった新しい価値と可能性に出会うことが必ずあると実感したからです。来年の大会は「ゲゲゲの女房」で今話題となっている鳥取県！鳥取砂丘のイソコモリグモに出会えることを夢見つつ、開催日に向けて精進していく所存です。

(東邦大院・理・地理生態)



同好会情報

ここでは日本各地にあるクモ同好会で発行されている定期行物の内容、採集会や講演会（総会・例会）の日程などを紹介する。興味を持たれた方は入会したり、行事に参加されてはいかがでしょうか。

【同好会紹介】

京都クモゼミと関西クモゼミの紹介

吉 田 真

京都クモゼミは、1982年に、新海明さん・加村隆英さん・伊藤千都子さんらとともに作った組織である。私は、1977年に、理工学部の助教授として立命館大学に赴任しており、ゼミは金閣寺の近くにある立命館大学衣笠キャンパスの私の研究室で、基本的には毎月、行なわれた。

内容はおもに、文献紹介と研究発表だった。当時私は30代半ば、他のメンバーは20代で、みんなクモに関する知識に飢えていた。文献紹介では、アメリカ・イギリス・フランスのクモ

学会誌の論文の紹介や、Foelix (1980)の“Biology of Spiders”の輪読などをやっていた。“Biology of Spiders”は、翻訳して出版しようと考えていたのだが、残念ながら実現しなかった。

新海さんは毎月東京から駆けつけ、私の家に泊まって、一泊二日でゼミに参加していた。すごい行動力である。子供のときに新海さんに遊んでもらった私の息子たちは、いまだにそのことをよく覚えている。

しかし、このゼミのレギュラーメンバーはわずか4名。そのために、参加者は毎回のようには文献紹介や研究発表をしなければならない。そのうちにしんどくなって、京都クモゼミは「一時休止」に陥り、二度と再開されなかった。ゼミをやっていた期間は5年ほどだったと思う。新海さんはその後、東京でゼミを作った。これがかの有名な東京クモゼミである。

そんな新海さんの活動に刺激されて、私は1994年に再びクモゼミを作った。これが今でも続いている関西クモゼミである。ゼミの資料をちゃんと整理していないのでうる覚えであるが、このゼミも最初は文献紹介と研究発表がおもな内容であった。参加者は京都クモゼミよりも多かったが、発表者を確保するのはなかなか大変だった。関西は東京よりも人口が少ないので、クモ研究者・愛好者も少ない。ゼミの参加者が少ないのも仕方がないかと、私は半ば諦めていた。

数年前に、この状況が一変した。ゼミのやり方を根本的に変えたのである。ゼミの会場となっていた生物実験室(滋賀県草津市の立命館大学びわこ草津キャンパスの一角にある)には、クモ図鑑や双眼顕微鏡などクモの同定に必要なものが揃っていた。これを使って、研究発表だけでなく、クモの同定も行えるようにした。名前が分からないクモを皆が持ち寄り、講師に

同定してもらおうと言う趣向である。加村さんや熊田憲一さんが講師になってくれた。

同定会は、朝から晩まで延々と続いた。クモ歴が浅い池田勇介君、小池君などの同定能力の向上に、この同定会はとても役に立ったに違いない。私も、クモのリスト作りに興味を持って各地で採集をやりだしたところだったので、お二人にはとても世話になった。

しかし、クモゼミに集まってくる人たちがすべて、採集や同定に興味を持っているわけではない。そういう人たちのために、「キャンパスの自然を食べる体験」を導入した。このキャンパスは山に囲まれており、食べられる野草や木の実がたくさんある。春にはツクシやワラビを採集し、タラの芽・ヨモギ・カラスノエンドウなどを天ぷらにして食べた。秋には、アケビや栗が実る。冬にはフユイチゴの実を集めてジャムを作る。池田家は勇介君だけでなく家族で参加されることが多く、昼ごはんは勇介君のお父さん・お母さんが作ってくれた。感謝感激である。

関西クモゼミはこのように、定食のような「ゼミナール」からごった煮のような「多目的ゼミ」へと変貌した。その結果、このゼミは少ないときでも10名、多ければ20名にも及ぶ人たちが集まるようになった。

関西クモゼミは、最近では年に4回(4月、6月、10月、12月)開かれるようになった。しかし、私がこの春に退職したために、いつまでこの場所でゼミができるか分からない。できるかぎりこのゼミを続けたいとは思っているが。

なお、次回のクモゼミは12月18日(土)10時半から行います。

関西クモゼミ

会費などなく誰でも参加できる。

連絡先 吉田 真 077-561-2660

中部蜘蛛懇談会（代表：緒方清人）
会報「蜘蛛」を年 1 回、「まどい」を年 3 回発行．採集会を年 2-4 回．総会・研究会を年 1 回実施．

蜘蛛（KUMO）43 号（2010.8.20 発行）
貞元己良：Oh, リベンジ in 長野
新海 明：「まつだい農舞台」の罌とクマダギン
ナガゴミグモにひっかかってしまった私
徳本 洋：能登半島沖の小島，舩倉島のクモ ジ
ョロウグモはどのようにして島へ入り込んだ
か
緒方清人：愛知県常滑市常滑のクモ（3）
緒方清人：ネコハグモの網にハエ類がよくかか
っている
緒方清人：網糸を食べる蜘蛛 2 種
緒方清人：愛知県産クモ目録 追加と削除なら
びに変更と改称
緒方清人：コカニグモの産卵数
須賀瑛文：東北の旅で採集した蜘蛛
吉川博章：アシダカグモの脱皮
吉川博章：ニホンヒメグモの体色変化とまどい
の観察
柴田良成：世界最大の蜘蛛を見学
杉山時雄：トヨタの森のイセキグモ属
短報
増田和昌：岐阜県郡上市大和町のヤスデ

総会・研究会は 2011 年 2 月 11 日(金)を予定．

入会申し込み他
全般について
〒472-0022 知立市山屋敷町東山 10-6
緒方清人（代表）
Tel 0566-83-4474
E-mail:neon_kiyotoi@ybb.ne.jp

入会・会費など
〒451-0066 名古屋市西区児玉 1-8-24
柴田良成（会計）
Tel 052-522-1920

会費
正会員 年 3000 円（高校生以下 1000 円）
準会員 「まどい」のみ 1000 円

東京蜘蛛談話会（会長：新海栄一）
会報「KISHIDAIA」を年 2 回，「談話会通信」
を年 3 回発行．採集会年 4 回・合宿年 1 回・総
会例会などを年 2 回実施．

今年度の採集会は，東京理科大学理想記念自
然公園で行います．

2月13日（日）
東武野田線「運河」駅改札前 10：00 集合．世
話人：八幡明彦

例会は，
12月5日（日）午前 10 時から東京環境工科専
門学校で実施．

KISHIDAIA 98 号（2010.10.31 発行）
新海 明・杉本雅志・谷川明男：ワクドツキジグ



東京蜘蛛談話会 5 月採集会参加者一同

モの綱，日本でついに発見
貞元己良：女神の微笑み
新野真由子：産卵が早いと出のうも早い：葉に
産卵されたジョロウグモの卵のう
池田博明：ハエトリグモの学名の解説（2）ア
リグモ物語
新海 明：津軽半島斜陽館から新潟へ イソコモ
リを求めて
荘司康治郎：シロオビトリノフダマシの卵の
う寄生蜂
藤澤庸助：ヒメハナグモと出会いの記
D R A G L I N E S
貞元己良：都内でクロガケジグモを採集した
笹岡文雄：住宅地，屋内で採集されたヤマトヤ
ギヌマグモ
笹岡文雄：ジョロウグモの共食い
新海 明：スズミグモの綱をあきる野市で発見
新海 明：アズチグモがクモを捕食
馬場友希・吉武 啓：沖縄島で採集されたクモ
馬場友希・吉武 啓：茨城県南部で採集されたク
モ II
藤澤庸助：須坂市の高地におけるクモ類の採集
記録
馬場友希：千葉県で採集されたクモ
谷川明男：日本産クモ類目録 ver. 2010R2

入会申し込み

〒186 - 0002 国立市東 3 - 11 - 18 - 201
（有）エコシス
初芝伸吾 （事務局）
Tel 042 - 501 - 2651
E-mail:hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

会費 年 3800 円（学生 2000 円）

関西クモ研究会（会長：田中穂積）
会報「くものいと」を年 2 回発行．採集会・研
究会例会などを年数回実施．

例会は，2010 年 12 月 19 日（日）に四天王寺
高校で実施．

入会申し込み

〒567 - 8502 茨木市西安威 2 - 1 - 15
追手門学院大学生物学研究室内
関西クモ研究会 Tel 0726 - 41 - 9550（加
村研）Fax 0726 - 43 - 9432（大学教務課）
会費 年 1000 円

三重クモ談話会（会長：橋本理市）

会報「しのびぐも」を年 1 回発行．採集会・合
宿・例会などを年数回実施．

採集会

11 月 28 日（日）度会町宮川流域
JR 伊勢市駅表玄関 10 時集合
2 月 27 日（日）年度末活動まとめと情報交換
の会 津市白山町猪倉温泉
近鉄榊原温泉口 10 時集合
いずれも参加希望者は必ず 1 週間前までに事
務局に連絡ください．

入会申し込み

〒515 - 0087 三重県松阪市萌木町 7 - 4
貝發憲治 （事務局）
Tel (Fax) 0598 - 29 - 6427
会費 年 2000 円

東京クモゼミ

毎月 1 回，第 1 日曜日に千葉県市川市の加藤宅
で開催．会費などなく誰でも参加できる．

連絡先 新海 明 0426-79-3728
または、加藤輝代子 047-373-3344

メーリングリスト「クモネット」
会費などなく誰でも参加できる．入会の申し込みは谷川明男まで e-mail で．
dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

言いたい！聞きたい！



ハエトリグモの論文再読（５）

ペッカムの性選択理論

池田博明

「ペッカム学会 The Peckham Society」というハエトリグモ愛好者のコミュニティ（URLは <http://www.peckhamia.com/>）がネット上にもサイトを作っている．このサイトはハエトリグモに関連する論文や資料なら分類・生態・生理・分子遺伝などなんでも取り上げている．ペッカムのほとんどの論文は印刷時のスペルミスまで訂正されてデジタル化されているし、pdf



で提供可能な論文はすべて pdf 化されて紹介されている．ハエトリグモ愛好者には大変に有用なサイトである．

ところで、このサイトの名前の元になっているジョージ・ウィリアム・ペッカムとエリザベス・マリア・ギフォード・ペッカムの、いわゆるペッカム夫妻はクモ研究者にはアメリカ合衆国のハエトリグモのクモ学者として知られている．夫妻は狩りバチにも関心があり、行動の論文もある．それら狩りバチやハエトリグモの論文は現在では複製本として安価で市販されているものも多く、ウィスコンシンの地方科学誌に発表された論文の入手に手間と時間と経費がかかった数年前とは隔世の感がある．また、狩りバチの生態記録はファーブルの『昆虫記』に習って一般読者に親しみやすいスタイルで書かれていて、現在でも好評である．

ジョージは 1845 年 3 月 23 日、ニューヨーク生まれ．1872 年 27 歳で医学博士号を取得したが、医師にならずにウィスコンシン州のミルウォーキー東高校の生物教師になった．1880 年にアメリカ初の高校生物実験プログラムを組織し、その後、東地区会長や教育委員会委員長を歴任、1897 年から 1910 年の退任までミルウォーキー公立図書館館長を務めた．1914 年 1 月 10 日に 68 歳で亡くなった．妻のエリザベスは 1854 年 12 月 19 日、ミルウォーキー生まれ．1876 年にヴァッサー大学を卒業、女性参政権確立運動などに参加、ミルウォーキー市の最初の司書のひとりであった．亡くなったのは 1940 年 2 月 11 日、85 歳であった（以上の経歴は Wikipedia による）．

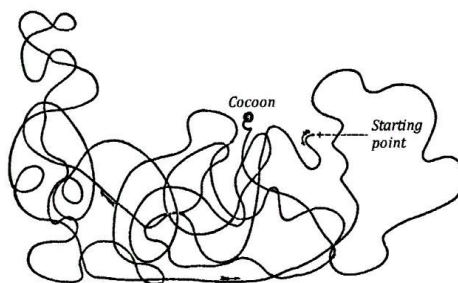
二人はダーウィンの性選択を重視する観点に立ち、形態だけでなく行動も重視してハエトリグモの分類を行なった．性選択に関心を持ったことは女性の権利に敏感だったエリザベスの影

響があると思われる。また、『昆虫記』を愛読し、狩りバチの研究ではファーブルに深甚の謝意を記している。高校生物教育で「ダーウィンとファーブルに学べ」と言ってきた筆者には、ペッカム夫妻は先駆者とも言えるクモ学者であり、その姿勢には親しみを覚える。

1883年『北米各地から得られた新種及び珍種のハエトリグモ』を皮切りに23篇めの1909年『北米のハエトリグモ総覧』まで、二人が記載したハエトリグモは63属366種になる。2009年は『北米のハエトリグモ総覧』から百周年記念ということでペッカム学会では記念行事が行なわれた。

二人の論文題を列記するだけでその精力的な仕事が理解できるが、ネットで検索できる情報を転記するのは紙面の無駄使いであろう。ハエトリグモの記載論文ではなく、エッセー風に書かれた1887年の夫妻（ジョージは42歳、エリザベス33歳）の共著論文『クモの精神力に関する幾つかの観察』、1889年の夫妻の共著『ハエトリグモの性選択の観察』をまず紹介しよう。

『クモの精神力に関する幾つかの観察』（1887）全36ページは、『形態学雑誌』に投稿された。「クモの精神力 mental power」とは異様な用語だが、「はじめに」の後に「嗅覚」「ヒアリング」「母性情動」「視覚」「擬死」「クモのする間違い」と続く感覚生理の内容であった。観察や実験に使われているのはハエトリグモだけではない。例えば「母性情動」はコモリグモが主である。「嗅覚」の実験は、20cm長のガラス棒の端部に匂い物質を付けてクモに近づけて反応を観察、同じ物質を再び同じ場所に付けて観察をくり返すというもの。ハエトリグモやムレサラグモ、円網種、徘徊性も含めて全部で30種余で“220回の実験を行なった。反応しなかったのは3種だけで他のすべての種はなんらかの



ROUTE FOLLOWED IN FINDING COCOON, BY PARDOSA PALLIDA.

反応をした”。「ヒアリング」では音叉を使った実験を行なっているが、音叉は大きさでABCと区別されていて、振動数の記述がない。7ページにわたる記録からは、音叉に対する円網種の慣れという現象が見られる。「母性情動」ではカイゾクコモリグモ *Pirata piraticus* やコモリグモの一種、フクログモやヒメグモの一種などの卵のう除去実験が記述されていた。

「視覚」ではすぐ近くの卵のうを見つけるまでのコモリグモの試行錯誤の動きから、視覚能力はあまり無いと結論していた。ちなみに、この論文の付図はこれだけである。「色覚」は派手な色彩のクモの存在から色覚が前提とされているが、ハラクロコモリグモの一種 *Licosa nigriventris* を使って色彩部屋の選択実験を行っていた。赤色・青色・黄色・緑色の部屋を作って最初にある特定の色の部屋に置き、しばらくして部屋の位置を変え自由に移動させたとき選んだ部屋の色をテストしていた。赤色の部屋を選んだ回数が181回と多く（黄色32、緑色13、青色11）、このクモは赤色を好むようだと結論している。反対に青色は好まれていないようだと結論しているが、後年のミツバチに色覚があることをミツバチの学習能力を応用して証明したフリッシュの見事な実験（フリッシュ、）や近年のデ・ヴォーの電気生理学的な研究の結果からコモリグモの主眼は紫外線（360-370nm）と緑光域（510nm）に、側眼

は緑光域のみに吸収のピークを持つこと (Yamashita, 1985) を既に知っている現代人からすると、この結果は色よりもむしろ明度に関連したものと思われる。

「擬死」10ページはいわゆる“カタレプシー”のこと、「クモのする間違い」は別種や別個体の卵のうを付けるコモリグモのことが記述されていた。

『ハエトリグモの性選択の観察』(1889) 全60ページは『ウィスコンシン自然誌学会特別論文集』創刊号の冒頭に置かれた。

第1節「はじめに」では、夫妻はこう書いていた。「ウォーレスの『動物の体色』とダーウィンの『人類の由来』で重視された性選択の意義をふまえて、私たちには体色の性差を説明する二つの理論がある。第一は「自然選択はメスの色を保護目的で変更する」こと、第二は「生産あるいは増強された色のあるところには過剰な生命力(バイタル・エナジー)がある。特に繁殖期に多く、オスでは一般的で、メスではときどき見られる」。二人は「本稿では第二の理論を考察する。なぜならオスがメスに比べて色が派手な原因としてウォーレスが重視したのが第二の理論だから」であった。生命力という用語が何を意味するのかは不明瞭である”(以下も訳は抜粋である)。

ウォーレスは例えば『熱帯の自然』(1887年) 第5章でも動物の色彩を論じていた。ダーウィンの性選択理論には、闘争等による雄同士の選択つまり同性間選択と、派手な雄を雌が選ぶといったような雌の選択(female choice)、つまり異性間選択という雌雄双方の選択があったが、ウォーレスにとってはオスがメスに選択されるということが信じられなかった。そこで、オスの過剰な生命力が派手な色彩を生み出すと

いう色彩発達理論をあみ出すことになったのである。ウォーレスはメスよりもオスの生命力が大きいのは当然のこととして理論を展開していくのだが、夫妻はこれに疑問を呈していた。例えばメスの体重はオスより重いことも多いし、繁殖や子育てにかけるエネルギーはオスに比べて決して小さいとは言えないのではないかと。このあたりはエリザベスの面目躍如といった気配がうかがえる。夫妻はウォーレスの理論や根拠(ハチドリなど)を説明していく。しかし、“コムリはその活発な活動性と幅広い外被にも関わらず、なんの装飾を持たないし、鮮やかな色彩も持ち合わせていない。クモの世界には彼の性的色彩理論を検証する簡単な例がたくさんある”。 “通常はクモには装飾はほとんど発達していないという印象があるが、これは真実からほど遠い。ウォーレス自身も『熱帯の自然』で「小さなハエトリグモの数と色彩の豊かさ」に注目し、「宝石のようだ」と書いている。『アマゾンの博物学者』のペーツも同様である”。これらの事実はオスの派手な色彩が活発さと生命力によるものだという仮説をあてはめやすい。だが、“ハエトリグモを例にとってみても、メスのほうがオスより大きく強く、喧嘩好きな場合も例外なくあるのだ。ある種のメスはオスの3倍の大きさがある。オスがメスを避け、追いかけたメスがオスを殺してしまうことさえある”。 “カニグモでもメスの凶暴さに比べてオスは小さく平和的である。すべてのメスが凶暴で喧嘩好きというわけではない。サラグモの雌雄は同じ網内に共存している”。

“トゲグモの場合にはメスが大きく色彩も鮮やかである(fig.1)”。こんな風にオスの生命力がメスより過剰だという事実に対する反証が列挙されていく。メスの保護色に関しても、巣や卵のうと似た色をしているメスはあるものの、

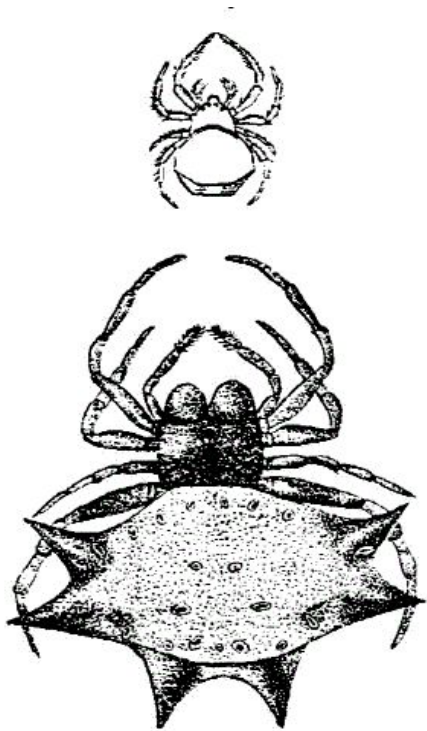


Fig. 1.—*Gasteracantha rufospinosa*. Upper figure, male enlarged seven times; lower figure, female, enlarged four times (from Marx.)

巣を作る習性とメスの色彩発生には関係があるとは思えず、色彩は習性に先んじて進化したと考察される。

夫妻は第2節に「脱皮習性」という見出しを掲げて、成体になると幼体とは著しく色彩が変化することを取り上げていた。当時、クモの研究は成体標本が中心で幼体からの変化に関する情報は少なかったという。「ハエトリグモが成熟に達するまでには7回から8回の脱皮をすと思われる。なかには10回脱皮をしてまだ未熟という種もあった。3回目か4回目の脱皮で特

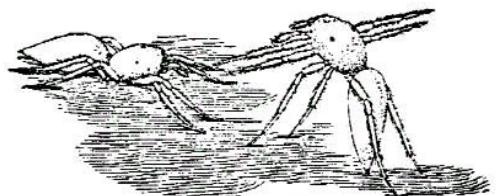


Fig. 17.—*Marptusa familiaris*. Positions in courtship: left-hand figure female, right-hand figure male (from nature by L. K.).

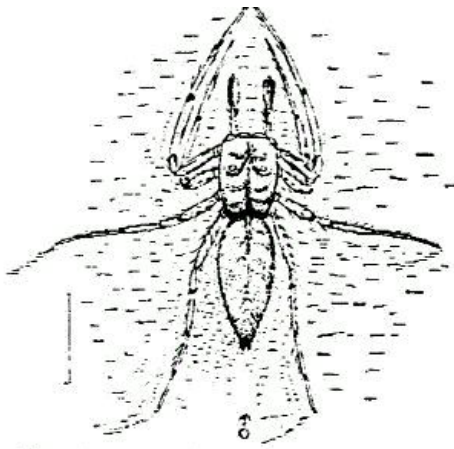


Fig. 26.—*Astia vittata*. Position of male approaching female (from nature, by L. K.).

徴的な色彩が現れてきて、その後の経過によっていくつかのグループに分類される”。

第3節「例を分ける」では、雌雄の色彩や形態の特徴をクラス「成体オスが成体メスと異なる顕著な特徴をもち、雌雄の幼体は成体メスに似る」、クラス「成体メスが成体オスと異なる顕著な特徴をもち、雌雄の幼体は成体メスよりもむしろ成体オス、特に脱皮初期に似る」、クラス「成体オスは成体メスと似ていて、雌雄の幼体は成体に似る」と分類して、ハエトリグモはほぼクラス に、トゲグモはクラス に、コモリグモやワシグモはクラス に含めていた。

第4節「二次性徴」では、アリグモのアリ似た特異な形態や成体オスの上顎の特殊化、アシナガグモの成体オスの発達した上顎が特に注目されて紹介していた。

第5節「交尾習性」では、*Marptusa familiaris* など15種のハエトリグモの求愛行動や交尾行動が観察・記述されていた。なかでもオスに普通型（明色型またはグレイ型。オレンジ色の触肢と前中眼上縁に白帯がある）と黒色型（暗色型またはタフト型）の二型があり、求愛行動が普通型は伏せの姿勢でメスに接近するのに対し、黒型は第1脚を高く振り上げて接近するといった具合に型によって異なる *Astia vittata* は興

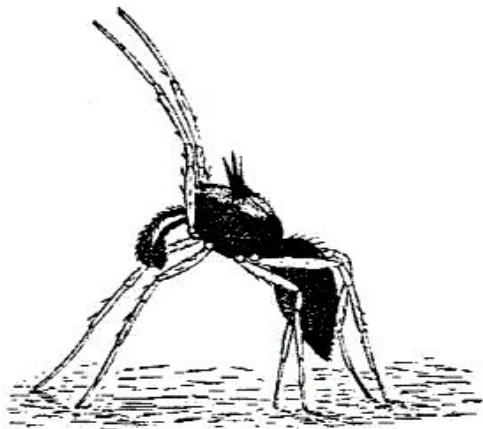


Fig. 27.—*Astia vittata*, var. *niger*.
Position of male approaching female
(from nature, by L. K.).

味深い種であった。このオスに二型を持つハエトリグモ（学名は *Maevia vittata* , そして *Maevia inclemens* と変わった）の求愛行動は一世紀後にクラークにより詳しく分析された。クラークの実験によると、雄に二型のあるハエトリ（*Maevia inclemens* ）を用いて、雌の配偶者選好性を調査した。実際の雄を用いた実験では一方の型に選好性を示したというよりも、先に動きだした雄に定位したと思われたので、再生ビデオとコンピュータアニメ技術を使って、同時に動き始めるようにしたところ、雌は雄の型には依存せず、最初に定位した雄を選ぶことが明らかになった。雄の二型の野外での生息する比率は等しかった（Clark and Uetz, 1992）。交尾成功率、配偶行動と時間、受容の信号、生産子孫数においては、型による有意な違いはなかった。しかし、メスからの距離の関数としての視覚的な定位の潜伏時間に関しては異なっていた。メスに近いほど、普通型雄が黒色型雄よりもメスの注意をひきつけ、潜伏時間は短かった。逆にいえば、雌から遠いほど黒色型雄が雌の注意をひきつけたので求愛時間は短かった。雄の型はどちらも交尾成功が等しいレベルに達していたこと、オスの二型はメスからの距離が異なる求愛の代替繁殖戦略として進化

したことを示唆していた（Clark and Biesiadecki, 2002）。

第6節は「要約と結論」である。「ウォーレスの色彩理論は鳥類と蝶類には当てはまるかもしれないが、クモには当てはまらない。脱皮習性からみても成体オスが派手な色彩であってもその幼体はむしろメスに似ている。ウォーレス理論によれば、オスは徐々に生命力を増しているはずだから、この事実はおかしいことになる。活発なコモリグモが地味な色彩で、じっとしているコガネグモが派手な色彩なのも理論に合わない。さらに注目しておきたいのはオスが喧嘩好きな行動を示すのはメスの存在下であって、繁殖時期が終わるとこのような闘争傾向を失ってしまうということである”。

夫妻は、ダーウィンの性選択理論に軍配をあげていた。夫妻は翌1890年にも、ウォーレス理論に関する『追記』を書いて、弱点を指摘した。

[参考文献]

Clark, D.L. and Uetz, 1992. Morph-independent mate selection in a dimorphic jumping spider: demonstration of movement bias in female choice using video-controlled courtship behaviour. *Anim.Behav.*, 43:247-254.

Clark, D.L. and B. Biesiadecki, 2002. Mating success and alternative reproductive strategies of the dimorphic jumping spider, *Maevia inclemens* (Araneae, Salticidae). *J.Arachnology*, 30:511-518.

池田博明, 1993. 「二型のハエトリグモの配偶者選好性」の紹介. 東京クモゼミ報告, 74号.

池田博明, 2002. 「二型のハエトリグモ, マエヴィア・インクレメンスの配偶成功と代替繁殖

戦略」の紹介.東京クモゼミ報告,134号.

Peckham, G. W., and E. G. Peckham.
1887. Some observations on the mental powers of spiders. The Journal of Morphology 1 (2): 383–419.

Peckham, G. W. and E. G. Peckham.
1889. Observations on sexual selection in spiders of the family Attidae. Occasional Papers of the Natural History Society of Wisconsin 1 (1): 1–60. Plates I–III.

Peckham, E. G. 1889. Protective resemblances in spiders. Occasional Papers of the Natural History Society of Wisconsin 1 (2): 61–113, Plates III–IV.

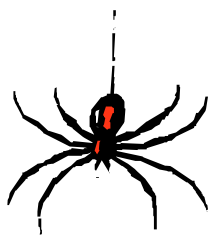
Peckham, G. W. and E. G. Peckham.
1890. Additional observations on sexual selection in spiders of the family Attidae, with some remarks on Mr. Wallace's theory of sexual ornamentation. Occasional Papers of the Natural History Society of Wisconsin 1 (3): 117–151. [Kessinger Publishing 版あり, 2010].

ウォーレス, 1878. 熱帯の自然. 平河出版社.
訳書 1987. 谷田専治訳, 新妻昭夫協力.

ウォーレス, 1890. マレー諸島 (10 版). 思索社, 訳書 1991. 宮田彬訳.

Yamashita, S., 1985. Photoreceptor cells in the spider eye: Spectral sensitivity and efferent control. IN Barth (ed.), Neurobiology of Arachnids. 103-117.

新妻昭夫, 2010. 進化論の時代. みすず書房,



第 18 回国際クモ学会議 ポーランド印象記

本多佳子

夏といえば、旅行に採集、クモ学会！そして今年には三年に一度の国際クモ学会議の開催年。東京蜘蛛談話会の観察会と合宿に被ったので迷ったが、学生生活最後の夏休みである、行くしかない。調子に乗って口頭発表を申し込み、通常の数割増の緊張感に包まれながらポーランドへと旅立った。

07/11(日)

10 日の夕方に馬場さんにつくばから成田へ向かい、空港で東大の宮下先生と合流。家族旅行以外での渡航は初めてで、同行して下さる方がいて大変心強かった。日本からポーランドのワルシャワ・フレデリック・ショパン空港までは直行便が無いので、22 時に成田を出発し、パリ経由でワルシャワに到着したのは現地の翌 11 時であった。機内では積荷ミスでイヤホンが配布されず、隣席の自称脚の長いフランス人に通路側席を奪われ、ついでに機内食もデザートは二品あるのに野菜が無いなど早速文化面の違いを感じさせられた。

ワルシャワに到着すると、期待していた涼しさはなく...陽射しはまるで日本の真夏。セミがいないだけである。空港では学会 T シャツを着たスタッフに案内され、貸し切りバスで会場へ向かった。この時点で私のカメラはスーツケースにぶつけた衝撃でピント調整機能が不能に。まだ学会は始まってすらいらないというのに...。学会会場は首都ワルシャワから車で東へ 2 時間程の Siedlce という人口 8 万人程の町である。外国人の訪問も珍しいらしく、宮下先生はここ

をポーランドの秩父と呼んでいた。受付を済ませ、夜は Welcome Party に参加した。春に谷川さんの元にタイから弟子入りしていた Booppa や、タイの農務省から来ていた Yuri と出会い、彼女達とは学会終了後のワルシャワまで殆ど行動を共にすることになった。ちなみにこの日は南アフリカのワールドカップ決勝戦(スペイン vs オランダ)当日で、特設会場のスクリーン前はかなり盛り上がっていた。

私の宿泊先は Student hostel であった。シャワーとトイレ、台所は共有で寝室が2つに分かれる2人部屋である。夜中になっても新たに人の来る気配は無かったので、誰も来ないだろうと寝室のドアとスーツケース全開という無防備な状態で眠ってしまった。しかし翌日起きると隣の部屋には深夜に到着していたルームメイトが……。今回は申し込み時に Student hostel かホテルかを選択できたのだが、参加者が予想以上に多かったようで宮下先生や鹿児島大の山崎さんは車で20分程のホテルを指定されていた。

07/12(月)

大会初日は 9:30 からのオープニング(Chairman の Żabka 先生や Siedlce 市長の話など)で始まり、早速2題の基調講演が。私でも名前を聞いたことのあるコスタリカの Eberhard 先生は神経細胞の数と蜘蛛の小ささの限界について考察していた。初日の朝から大画面でクモの頭胸部断面図を見せられた時の興奮はうまく文章で表現できないが、改めてクモ学会に来ている実感が湧いた。毎日のスケジュールは9時から11時まで2題の基調講演があり、30分のコーヒブレイクと一時間半の昼食を挟みながら一人15分の一般講演が3会場に分かれ18時頃(15と16日は16時頃)まで続く、

といった具合に組まれていた。大会中の朝食と昼食の会場は講演会場から約20分歩いたところにあるホテルであったため、昼食時間の殆どは実質移動時間で、のんびり歓談していると講演を聞き逃すことになった。会場はAが分類関係、BとCにその他の講演がテーマごとに割り振られていた。私は基本的にBとC会場間を移動していたのだが、聞きたい講演が同時間で被ってしまう事が頻繁にあったのが残念だった。何とも贅沢な悩みである。そして壊れて異音を発するようになった私のカメラでは講演中の撮影が殆どできなかった。

夕食は宮下先生に誘って頂き科博の小野さん、台湾の Tso 先生のグループと一緒に市内のレストランへ。実は小野さんと直接お話をする機会は何度かあった筈なのだが毎回逃してきたため、最初のご挨拶は遥か遠いポーランドでという奇妙な状況になってしまった。さて、Siedlce は観光地ではないため殆ど英語が通じない。レストランでも一人分かる人がいる程度で、人数や注文はまるでジェスチャーゲームであった。ポーランドの料理はロシアとドイツの中間のようで、とりあえず芋を主食に肉の塊を食べるような感じであった。物価も高いと聞いていたが、ユーロ安もあり食べきれない料理+飲み物が1000円以内に収まった。そしてお約束の二軒目へ向かう M 先生……。バーではポーランド



台湾チームとの夕食

人に絡まれ、彼らは馬場さんの名前に爆笑していた。理由は不明である。

07/13日(火)

大会も二日目、夕方に自分の発表があった。折角持ってきたのでスーツを着て向かったが、雰囲気は日本のクモ学会に近いので完全に浮いていた。しかも原稿を部屋に忘れてくるというミス。私の発表はシンガポールの Li 先生が座長を務める Ecophysiology のグループに入っており、前後の発表もなかなか変わった視点からの研究で興味深かった。サソリモドキの脱皮行動を報告した Haupt さんの動画は数時間に及ぶ撮影によるもので、脱皮映像の 15 分間は私にとって至福の時であった。自身の発表は若干早口になった感はあるが何とか無事に終えた。

この日は鶴崎先生やシンガポールの Diego 達と夕食へ。この日もやはり英語が通じず、山崎さんの持参していた「旅の指さし会話帳」が大活躍していた。旅先でのプロポーズにも使えるらしい優れものである。そして路上で出会った地元の高校生達がバーを案内してくれ、結局……。

07/14日(水)

日程も中盤にさしかかり、この日はエクスカーションでベラルーシ国境にある Janów Podlaski Stud へ向かった。午前中は Big river valley を散策。大きな河がゆったりと流れ、とても眺めが良かった。しかし水場なので視界には十数匹レベルの蚊が。今回スタッフをしていた Łukasz のチームはここでクモの生態調査をしているようだ。午後はサラブレッドの元であるアラブ種の養育場を見学した。途中で土砂降りもあり、私が見つけたクモは数種のコガネグモやヒメグモ、ハエトリグモという程度であっ



ベラルーシとの国境で。左から Yuri, Booppa, 本多, 宮下先生, 鶴崎先生

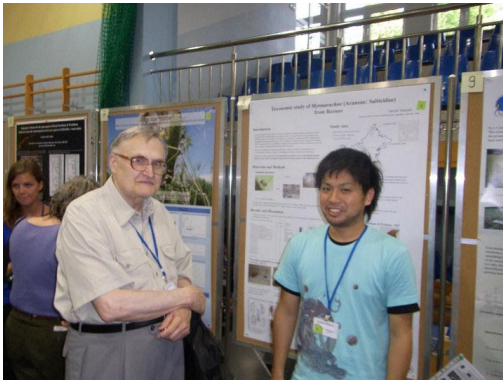
た。頑張れば色々採れたかもしれない。観光そっこののであちこちピーティングしている人もやっぱりいた。

夜はまた市内で食事。夏は 21 時頃まで明るいので夕食を食べている気がしない。M 先生が Żubrówka と Finlandia を瓶で注文し、気付けば 6 人で 40 度のウォッカを 2 本以上空けていた。今考えると恐ろしい量である。

07/15(木)

大会も後半に突入。この日は講演の後に 16 時半からポスターセッションが行われた。100 枚を超えるポスターは A 会場の壁際とコーヒープレイク室に用意された掲示板上に両面張りにされ、会期中回っても全てに目を通すのは大変だった。今回私の実験と似た手法を使っている人を見つけたので質問をしてみたが、のらりくらりとかわされてしまった。質問で食い下がるようになりたいものである。山崎さんはドラゴンボールの T シャツを着用して発表していた。ちなみに大会ボランティアの学生は「名前不詳の日本人男性はとりあえず GOKU と呼んでる」と言っていた。

夜は Congress party。そのまま参加してしまっただが、女性はしっかりドレスに着替えている



ハエトリグモの分類学者 Prószyński 先生と
鹿児島大の山崎さん



Russian party の様子

人が多かった．ドイツ人のテーブルに混ぜてもらったが，自己紹介で名前を伝えると「ホンダって日本人の名前だと思っていたけど，タイ人にもいるんだね」と返された．私は日本人ですが．前日までの勢いでウォッカの一気に飲みにつき合ったらアジア人がウォッカを飲むとは思わなかったと驚かれた．私も行く前まではそう思っていたのになあ．このパーティではなんと，クモのケーキが用意されていた．しかも2台も．そして日本では滅多にないが，国際学会ではダンスパーティが恒例だそうだ．DJ が居て会場の一角がディスコようになっており，老若男女関係なく飛び込んで皆で騒いで何時間も踊り続けていた．その風景もさることながら，その中にいるのが第一線でクモの研究をしている教授や博士だというのが「私は今すごい光景を見ている」としか言いようがなかった．私も紛れ込んできたが，翌日はサンダルずれで足がえらいことになっていた．

07/16(金)

一般講演終了後には ISA のミーティングが開かれ，亡くなった研究者の追悼や，5 月に火災がおきたブラジルのブタンタン研究所の状況報告などがあった．また「日本産クモ類」が高く

評価され，小野さんが表彰されていた．最後には次回の会場を決める投票があり，2013 年の国際会議は台湾で開かれる事が決まった．台湾チームは T シャツや国旗で事前から PR していて，私も髪に台湾の国旗を挿された．学会最後の夜は Student hostel の屋外でロシアンパーティが開かれた．最初は何の事か分からなかったが，要するに皆でお酒や食べ物を持ち寄り型のパーティであった．テーブルにはお菓子と世界各国の地酒が・・・．スタッフの方からポーランドの伝統的なお酒，蜂蜜酒 Miód Pitny を頂いた．ほのかに甘くておいしかったが，日本では買えないらしいのが残念である．パーティは深夜まで続き，M 先生が Elgar 先生に絡んだり，学会と関係ない酔っ払いが Student hostel の中に乱入してくるなど色々と危ない場面もあった．

07/17(土)

ついに学会も最終日．ずっと Siedlce に滞在する予定だったが，何も観光しないのも勿体無いので急遽予定を変更しワルシャワへと向かった．貸し切りバスで空港を経由し，市内まで送り届けてもらおうと宮下先生のスーツケースが無い．どうやら誰かが空港で降ろしてしまったら

しく、その後無事に発見された。そして私はホテルに向かうタクシーの車中にカメラを忘れた。まだ明るい夕方にワルシャワの旧市街を観光したのだが皆考えることは一緒らしく、かなりのクモ研究者とすれ違った。翌日早いのもう飲み歩きはしなかったが、私は深夜までフロントと部屋を往復してタクシー(カメラ)探しに明け暮れていた。

07/18(日)~

帰りの飛行機は7時過ぎにワルシャワ発の予定であったが離陸が一時間遅れ、パリでは土産を買う暇もなく慌ただしい乗り換えとなった。それ以外に特にトラブルはなく無事に19日早朝に日本へ帰国した。カメラを除き、さて、落としたタクシーの会社名とナンバーまで特定したのだが、2日経っても会社に送ったメールの返信が無い。仕方無く国際電話をかけてお客様センターのお姉さんにアドレスをもらい、カメラを返して欲しい旨のメールを再度送信。すると運転手がカメラを持っていたらしく、送料を銀行口座に振り込むようにと連絡がきた。2000円程度の送金に7000円の振込手数料がかかるのもおかしな話だが、思い出はブライスレス。そして私から遅れること3週間、カメラも無事帰国した。海外で落とした物が手元に戻ることは滅多に無いそうで、本当に運が良かったと思う。これからは座席、網棚、そして足下をチェックしてから降車するよう心がけたい。カメラ探しに協力して下さった皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。

思い返してみると私が初めて談話会に参加したのは前回のブラジル大会が行われた2007年であった。3年間とは長いようであつという間である。国際学会ということで最初はハードル

が高いなあと思っていたが、実際行ってみると日本の蜘蛛学会に似た雰囲気、大変居心地が良く一週間は夢のように過ぎ去っていった。次回開催地の台湾は距離も近く、日本からの参加もしやすい大会になるだろう。拙い文章ではあるがこの体験記が次回参加してみようという方々の参考になれば幸いである。

今回撮影された集合写真は学会のWebページ <http://www.arachnologia.edu.pl/congress2010/Photogallery.html> で公開されている(2010年11月現在)。

クモ切手の風景3(番外)

笹岡文雄

どんなことにもお国柄はあるものです。軍用機各個に愛称を付ける習慣は米英と日本だけのでしょう。その愛称の中で後にも先にも唯一、クモの名前が付いたものがあります。それはアメリカのノースロップP-61ブラックウィドウです。機体全部が真っ黒に塗装され、強力な武装がその名のゆらいになった夜間用の戦闘機です。第二次世界大戦中、大型爆撃機による大規模な空襲が始まります。敵の迎撃を避け戦果を上げるため多数機による夜間爆撃を各国が行うようになります。となると迎撃側もそれに対抗するため、夜間用の戦闘機を次々生み出していくことになりました。各国が既存の機体を流用する中、P-61は当初から夜間専用の戦闘機として開発された最初の機体でした。全長約15m前幅20m自重約10t双発3人乗りで、おおよそ戦闘機にしては巨大なものでした。そのため運動性は低く、速度も遅い部類に入ります。しかしその攻撃対象の爆撃機は大型鈍重ながら、堅牢で防御火器も強力でした。そのために武装

強化を図った結果、運動性やら速度を抑えてこのようになったのです。ちなみにかのゼロ戦は全長約9m前幅約12m自重約2.4t 単発1人乗り、P-61の大きさで6割、重さは1/4でしかありません。1944年後半に戦場に投入され、朝鮮戦争中の1952年までの8年間で全機退役となりました。航法装置やレーダーの発達で「夜間戦闘機」という機種を、すでにジェットの時代に突入していたことで「レシプロ機」を、その舞台から追いやりました。P-61もレシプロ夜間戦闘機というダブルパンチで、夜間戦闘機としては優秀だった「クロゴケグモ」も時代の流れに逆らえず姿を消すことになったのです。その後クモの名前を冠した軍用機は1機も生まれていません。



切手はコンゴ民主共和国(旧・ザイール)発行のアメリカ軍用機シリーズ6枚組の1枚。額面530FC FC(コンゴフラン)は1\$=775FCなので1\$=¥100とすると約68円です。



小さな生きものたちの不思議なくらし

甲斐信枝著 A5判/160pp. 福音館書店



2009年 ISBN978-4-8340-2467-8 本体1,400円

甲斐信枝さんは京都在住の絵本作家で、草花や虫をテーマとした科学絵本を多数出版されている。身近な自然を連日のように根気よく丹念に観察し、あまり細か過ぎない柔らかなタッチの絵と、暖かみのある文章で綴った、珠玉の作品ばかりである。それらの作品の3分の2以上は、福音館書店の児童向け月刊雑誌に発表されたものであり、そしてその大部分が、後年、好評につき単行本として発行されている。

雑誌には保護者向けの折り込み付録がついていて、そこには「著者のことば」が載っている。執筆の動機や苦労話、対象の生きものへの思いなどが書かれており、大変興味深い。しかし単行本版にはこの折り込み付録はついていない。よほど注意していないと雑誌の新刊情報には気付かないもので、単行本の発行で作品の存在を知った時には、オリジナルの雑誌版は既に売り切れか断裁処分されていて入手できないことが多い。街道沿いに多い新古書チェーン店でたまたま見つけても、大抵の場合、付録は紛失している。従って、発行時に雑誌を購入しない限り「著者のことば」はなかなか読めないことにな

る。

そんな甲斐さんの「著者のことば」ばかりを集めた本が「小さな生きものたちの不思議なくらし」(以下「小さな生きもの」と表記)である。ご自身の作品に寄せた「著者のことば」19編に加え、折り込み付録に掲載された連載記事8編、NHKラジオ「人生読本」で放送された内容、それに書き下ろし1編が収められている。

実は私は、科学絵本であるなら絵も極力正確であるべきだ、との思いから、熊田千佳慕さんや安永一正さんなど、超緻密な絵が描かれている絵本が優れていると考え、甲斐さんの作品は一段評価を下げていた。しかし、本書を読んで「科学絵本であっても、知識としてではなく感動として伝えたい」というご本人の思いを知り、その評価ががらりと変わった。絵が精密でなくても、子どもたちに自然をうまく伝えられれば優れた科学絵本なのである。

ところで、甲斐さんの著作の一冊に「こがねぐも」がある。これは最初、月刊誌「かがくのとも」1982年9月号として出版され、その後1984年に単行本として再刊されたものである。さらに2009年には「小さな生きもの」の出版に合わせて限定版として増刷されたが、残念ながら、現在は全て品切れである。この作品の最大の特徴は、野外ではなく屋内の飼育条件下のコガネグモを取り扱っていることである。しかも餌に刺身を食べさせているのである！

数年前にこの本を初めて読んだとき、「コガネグモが刺身を食べるなんて！」と思い、他に報告例があるか、池田博明さんの「クモ生理生態事典」のコガネグモの項を見た。すると八木沼先生が1981年に報告されていることが判った。さすが八木沼先生、と思いながら出典のAtypus no.79を開いたところ、何のことはない、甲斐さんのこの観察例を、八木沼先生が代



理で学会発表した際の講演要旨であった。

「小さな生きもの」には、この「こがねぐも」に関連して「かがくのとも」1982年9月号の「作者のことば」より採録された「おさしみを食べたコガネグモ」と、「ちいさなかがくのとも」2005年4-11月号の「折り込み付録」に連載された「私にとっての科学絵本-甲斐信枝さんに聞く-」が収録されている。前者には、クモがだんだんぜいたくになり、餌を粗末にするようになったことや、1頭のメスが10回も産卵したなどが書かれている。後者には、コガネグモの絵本を書きたいと思った理由や、出版社側の自然条件下での観察を絵本にしてほしいとの意向に従わず、自分が受けた感動をそのまま子どもに伝えるために、飼育した経験にこだわり続けてようやく絵本化が実現したことなどが記されている。

「こがねぐも」が出来上がるまでのいきさつが解るし、「こがねぐも」に関する部分以外にも、甲斐さんの自然を見つめる優しいまなざしが伝わってくる、心が暖くなる文章が揃っている。オリジナルの絵本を知らなくても楽しく読めるので、一読をお勧めする。

萩野康則(千葉県立中央博物館)

CD 日本のクモ ver.2010

県別クモ類分布図 CD をバージョンアップしました。今バージョンから池田博明さんの生理生態事典と統合して、タイトルを [CD 日本のクモ] としました。前バージョンまでは和名の五十音順の索引のみでしたが、本バージョンでは日本産クモ類目録を利用し、分類順学名和名からの索引を追加しました。

分布図が収録されているのは、日本産クモ類目録に収録されているクモのうち、確実な記録を確認することのできた 1551 種 (ver.2008 =1490 種) です。それぞれの種の分布図は、2010 年 6 月までに入手した 1344 の文献からひろった 62297 件の分布データに基づき spmap というソフトを使用して作成しました。このソフトはフリーソフトで、安藤昭久氏のホームページ <http://homepage2.nifty.com/spmap/index.html> からダウンロードできます。細分された種、同定に疑問がある種など分布記録が信頼性に欠ける場合には、分布地図の該当部分を淡色で表示し、別途コメントを掲載してあります。分布図は原則として県レベルですが、東京都、鹿児島県、沖縄県については島



レベルの分布地表現となっています。

写真が収録されているのは 828 種 (Ver. 2008=797 種) です。種によって雌雄および色彩変異、網などが網羅されているものもありますが、標本写真だけの場合もあります。価格は、初めての方は 8140 円、前バージョンまでのいずれかをご購入いただいている方は 2140 円とさせていただきます。ご購入くださる方は谷川宛ご連絡ください。

〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1

東京大学農学部生物多様性

谷川明男

E-mail: dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

(谷川明男)

採集情報

日本各地で採集された稀産種や、都道府県初記録、島初記録、南限更新、北限更新など分布上の重要情報について掲載する。これを読み、「私もこんな種類を採集しているぞ」という方はその情報を是非お寄せいただきたい。

【この掲載を始めてからかなり年数が経ってからの提示になってしまいましたが、このコーナーに掲載する記録は、証拠標本か、同定のキーとなる特徴がはっきりと撮影されている写真かのどちらかがあるものに限定させていただきます。目撃談のみのものにつきましては取り上げません。また、幼体の記録についてはいろいろと議論のあるところですが、とりあえず现阶段では、参考記録として掲載を継続させていただきます。】

タテスジハエトリ 長崎県対馬市豊玉町和坂
2010年6月12日 1 境 良朗採集・谷川
明男同定確認(この標本により対馬産のタテ
スジハエトリが沖縄産のものと同一であることが
再確認できた。)

ツシマトリノフンダマシ 長崎県対馬市厳原町
豆酸崎 2009年6月28日 1 境 良朗採
集・谷川明男同定確認

ワクドツキジグモ 沖縄県恩納村谷茶
(N26.468 E127.836) 2010年5月25日
1 卵のう 谷川明男採集 張替智行氏による出
のう幼体からの飼育によって得られた雌雄成体
で同定。

ムツトガイセキグモ 群馬県桐生市桐生自然観
察の森園内 2010年7月19日 成幼不明 1
雌画像 寺内優美子発見撮影・池田博明同定確
認 茨城県つくば市観音台 2010年9月12日
1 馬場友希採集同定。

シラホシコゲチャハエトリ 茨城県つくば市高
崎自然の森 2010年5月23日 1♂ 馬場友
希採集同定

マツモトハエトリ 千葉県松戸市 21世紀の森
と広場 2010年6月6日 1y 馬場友希採集
同定

チリグモ 茨城県つくば市観音台農業環境技術
研究所 2010年6月9日 1y 馬場友希採集
同定

イワテハエトリ 茨城県つくば市若栗 2010
年6月12日 1♀ 馬場友希採集同定



タテスジハエトリ(沖縄島産)



ワクドツキジグモ卵のう

イナダハリゲコモリグモ 茨城県つくばみらい
市大和田 2010年6月12日 2♀1♂ 馬場友
希採集同定

イソハエトリ 茨城県高萩市高浜町 2010年
6月26日 1♂1♀ 馬場友希採集同定

タイリクケムリグモ 千葉県船橋市習志野台日
本大学構内 2010年7月30日 1 桑田隆
生採集同定, 加村隆英同定確認

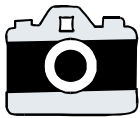
ヒカリアシナガグモ 千葉県船橋市日本大学理
工学部 GeoCode 5340-4064-4-1-4
2010年8月8日 1♀ 桑田隆生採集・谷川明

男同定確認

アシダカグモ 茨城県神栖市波崎 (N35.7519
E140.8105) 家屋内 2010年7月1日 1
熊谷直喜採集・谷川明男同定確認

カトウツケオグモ 沖縄県国頭村大國林道
2010年7月22日 1雌幼体 盛口 満採集・
谷川明男同定確認

(新海 明・谷川明男集約)



ギャラリー



「5月の東京蜘蛛談話会の観察会(野田市)で撮影したウデブトハエトリです。瓶に頭を突っ込んで奥を覗きこんでいる後ろ姿は何とも可愛らしいですね。腹部にはウデブトの特徴である白い横線が確認できます。」

写真撮影・解説：本多佳子

遊絲に奮ってご投稿ください。採集旅行記、小観察、採集記録、とっておきの写真などクモやクモにまつわる話などなんでもけっこうです。

遊絲原稿送付先

〒192-0352 八王子市大塚 274-29-603

新海 明まで

E-mailでは dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp (谷川明男)まで

発行は、年2回(5月、11月)の予定。締切は発行月の前月末日です。

日本蜘蛛学会

入退会は

庶務幹事

奥村 賢一

〒853-0041 長崎県五島市籠淵町 400-3

Tel 0959-72-6223

E-mail: coelotes@orchid.plala.or.jp

会費の問い合わせ及び住所変更は

会計幹事

平松毅久

〒350-0043 埼玉県川越市上戸 274-23

フレグラヌ上戸 203

Tel 049-233-8792

E-mail: th84arackne@bzt-com.ne.jp

年会費 正会員 7000円(学生は5000円)

郵便振替口座 00970-3-46745 日本蜘蛛学会

三菱 UFJ 銀行川越支店 普通 0026081 日本蜘蛛学会 会計幹事 平松毅久

遊絲 第27号

2010年11月25日発行

編集者 新海 明, 谷川明男, 池田博明

発行者 日本蜘蛛学会 会長 鶴崎展巨
